

# 鶴田町議会総務経済常任委員会 視察研修報告

視察先 栃木県茂木町、真岡市、益子町  
日程 平成29年8月25日(金)～27日(日)  
参加者 太田良一、長内齋、澁谷光正、花田正逸、加賀谷忠榮

【総務経済常任委員会】総務課(消防、水防及び防災に関する事務を除く)、企画観光課、税務会計課、産業課、建設整備課、議会事務局、選挙管理委員会の所管に属する事項について調査や議案、陳情などの審査を行う町議会常設の委員会

## ■道の駅「もてぎ」を視察

茂木町の古口町長は、「行政が口を出さない方が上手くいくと言う人もいるが、出さないといいないこともある」との考え方で道の駅「もてぎ」に、町職員を2人常駐させていました。町長自らも毎週時間を作り、最低2回は道の駅に顔を出して、チェックしているとのこと、今回の視察でも、町長自ら案内をしていただきました。

道の駅「もてぎ」では、6次産業化の実践により、町の特産品を全量買い取りとして、現物販売のほか、手作り工房での加工品作りや新製品の開発を進め、特徴のある商品を販売していました。

野菜栽培には地元の牛糞から作る「美土里のたい肥」を奨励し、地場産品のブランド化を推進しています。例えば、「納豆」一つでも、少々割高になってもきちんとした素材で安全安心な独自加工品として販売し、好評を博していました。そのほか、美土里農園の開設や「松

きのこ」、「えごま」の栽培を奨励し商品化を始めた。従来からの「ゆず」の関連商品、道の駅初代グランプリ商品「ゆず塩ラーメン」や米粉を使った名物のパウムクーヘンなど、商品開発や販売コンセプトは我が町の道の駅つたるた「鶴の里あるじゃ」にも参考になることが大いにあると感じました。

また、施設の担当者の笑顔がすばらしく、「心からの笑顔」と感じられ、おもてなしの心が自然に伝わってきました。人口約1万3千人ほどの町の道の駅の交流人口が198万人にも上る秘訣は、若者の家族が集う施設だからであると感じました。平成25年に発生した東日本大震災を機に、防災拠点館を併設し、普段は幼児がいる家族向けの休憩場所として活用され、当日もたくさんの家族が集っていました。もちろん無料の休憩所です。その前庭に職員手作りの幼児プールがあり、幼児用のプール対応「おむつ」が350円で販売され、好評である

とのことでした。道の駅に防災拠点併設し、幼児対応のファミリースペースが誕生し、人気を博している。その着眼点に脱帽しました。道の駅「もてぎ」のコンセプトは、単なる地場産品の販売所ではなく、「町の産業創生」「雇用創出の中心」と捉えていて、「道の駅が駄目になれば、町も駄目になる」との信念がありました。さすが、全国モデル「道の駅」のひとつであると感じるところにも、コンセプトの確かさを認識しました。

## ■町の資源活用と国の制度への

チャレンジが生んだ中学校建設  
次に、茂木町のまちづくりについて、二つの施設を視察いたしました。

一つは、地場の木材をふんだんに使用した茂木中学校です。町有林のスギやヒノキを使って学校を作ることに、周囲の反対等もありましたが、地道にプロジェ

クトを立ち上げました。スタートした際は、町長から、「校舎の間取りは真四角、丸や三角は作らないように」「屋根は切り妻が片流れで」「集材材は使わないように」「校長室は町長室より小さく」という指示があったそうです。

こうして、「木が交わる」校舎が完成し、内外から高い評価を受けました。相当高くつくと言われていた事業費も、さまざまな補助金等により、通常の鉄筋コンクリート造とほぼ変わらない金額で完成し、今や観光スポットとなっています。

## ■まちなかに文化交流館

もう一つの視察先は、茂木町まちなか文化交流館「ふみの森もてぎ」です。今や日本全国どここの町でも中心市街地「まちなか」の空洞化が進んでいますが、茂木町でも例外ではありませんでした。そこで同町では、平成23年に閉じた約300年の歴史がある酒造蔵元や隣接していた病院跡地等、周辺民有地を含め1900坪を整備し、平成28年7月に、茂木町まちなか文化交流館「ふみの森もてぎ」を完成させました。「ふみの森もてぎ」は、図書館やギャラリー研修室を備え、多目的に活用できる文化施設であり、旧酒蔵の古材を再

今回、道の駅と二つの木造施設を視察しましたが、全てに共通することがあります。それは、施設で会う方々の「笑顔」でした。中学校では、夏休み中にもかかわらず、勉強に来ていた生徒たちが、町長さんを見ていて笑顔で会話をしていました。私たちが「青森から来ました」と話すと、改めて大きな声であいさつをしてくれました。

「ふみの森もてぎ」の図書館でも、司書の方々がとても素敵な笑顔で迎えてくれました。図書館で勉強をしている中学生や高校生が笑顔いっぱいであいさつしてく



△休憩所として利用されている道の駅「もてぎ」の防災拠点館



△木のぬくもりを感じる「ふみの森もてぎ」内にある図書館

トイレにウォシュレットを整備したそうです。これが生徒には好評で、特に女子生徒に好評を得ているとの事でした。

何事も一朝一夕にはいかないこともありませんが、今からすぐにもできることがあります。それは、町の顔である、道の駅つるた「鶴の里あるじゃ」や鶴の舞橋周辺のトイレの改修です。茂木町のほかに視察した真岡市の各施設もトイレが明るく清潔で、清掃も行き届いており、嫌な臭いは感じられませんでした。

施設や民意の醸成、教育の向上等はお金だけでは解決できませんが、トイレの改修は今からでも間に合うような気がします。あるじやと鶴の舞橋は、何と言っても町の顔ですから一考の余地はあると感じました。

### ■40年後の二宮町

40数年前、鶴岡町連合青年団が県外研修に出向いた先が、日本一の物部イチゴの産地である栃木県二宮町でした。2泊3日の期間で民泊し、地元青年たちと農業体験等の交流をしました。その二宮町が平成21年3月に栃木県真岡市と合併し、8万人の新真岡市となり現在に至っております。

真岡市のイチゴの販売額は80億円超で、そのうち60億円程度が旧

二宮地区での生産であるとのことでした。現在では、夏イチゴの栽培に取り組んでいます。冬イチゴと真逆の生産技術や販売知名度には、さまざまな課題が残っているように、地域全体への普及には時間が必要であると感じました。夏イチゴの視察で驚いたのは、必要最小限の防除で済むように、瓶詰の天敵害虫を用いた「天敵栽培」を行っていることでした。

他方、旧真岡地区では5つの工業団地があり、91社の企業が操業しているとのことでした。今現在も神戸製鋼が進めるガス発電所の大プロジェクトが進行中で、完成すると北関東地域の4割を賄う発電所になるとのことです。工業団地の販売率は95%超で、北関東自動車道真岡インターから東北・常磐・圏央道へのアクセスも容易で、ますます注目される地域であります。

街の中心線には、SLが走る真岡鉄道が通り、真岡駅にはSLキユーロク館が併設され、展示されている2機のSLの運転席に乗り込めるなど、SLファンにはたまらない魅力があります。たまたま、視察当日にSL乗車90万人達成記念のイベントに立ち会うことができたのは感動でした。

駅舎には真岡市情報センターが併設され、さまざまなコーナーが設けられていましたが、注目は、学習コーナーやキッズコーナーで、学習コーナーでは高校生が勉強しており、キッズコーナーではお母さんたちのグループが活動していました。

真岡鉄道の会議室では、会社の概要をご説明いただきましたが、栃木県および沿線の市町による第3セクターの運営で、年間赤字が400万円程度に抑えられている点は、沿線市町と真岡鉄道の努力が伺えるところでした。ここでも、駅舎と文化施設の掛け算を見ることになり、また、学生たちが「まちなか」で積極的に勉強に励む姿に感心しました。

### ■二宮町の民活力

今回、真岡市の野澤議長に勧められたのが、同市の二宮地区で行われる「尊徳夏まつり」でした。合併に際し、当時の真岡市と二宮町が、もともと二宮町で行われていた花火大会や盆踊り大会を「地域融合の証として続けたい」と、多くの人々の想いを込め、二宮町にゆかりの偉人、二宮尊徳翁の名を冠して開催したまつりです。会場の鬼怒川河川敷には、たくさんの出店が並んでおり、盆踊りのやぐらの周りにも町内会の各団体によるテント張りの出店が立ち並んでいました。日が落ちるまでの間、盆踊り大会の輪が三重三重になり、周辺の道は大渋滞で、規模の大きさを実感しました。

また、花火大会の中で、二宮地区の有志の皆さまから、「歓迎、青森県鶴岡町の皆さん」

とのメッセージ花火が打ち上げられました。

今回の尊徳夏まつりは、盆踊りや花火1万発を、市の助成金100万円と、実行予算総額900万円で行い、来場者は2万人以上ということでした。二宮地区の住民の活力の強さと誇りを感じざるを得ませんでした。

今後、行政において事業を企画する際は、求めている結果に到達できるよう、綿密に計画する必要があります。また、事業内容によっては、行政が取り組むより、民間の団体を取り組む方が自由度が上がり、良い結果を生むものもあります。そのため、町民と対話をしながら事業を任せられる団体や人材を積極的に育てていく必要があると考えます。



△真岡市二宮地区の尊徳夏まつり